

[音 楽]

表現の楽しさを味わい、いきいきと音楽活動ができる子をめざして

— 低学年音楽活動の重要性に着目して —

渾川久仁子*

1 はじめに

「おんがく」は、なぜ「音学」ではなく「音楽」なのでしょう。これは、私が教師になりたてのころ、ベテランの先輩教諭から問われた言葉である。初任者の時に担任したのは、山間部にある学校の5年生。30人前後の学級で、どちらかといえば音楽を苦手と感じている子どもの多い学級であった。階名がなかなか読めない子、リコーダーの指遣いが未定着な子が多く、リコーダー奏をしようとしても指遣いの確認から始まる子どもが何人もいた。この状態では合奏なんてとても無理と、なかなか自分の思ったように授業を進めることができず、悩みの淵にあった私。そんな私に先生は「〈おんがく〉は〈音楽〉なのだから、まずは子どもたちが楽しく音楽活動できることを第一に考えたらどうでしょう。」と、言われた。この言葉にドキッとしたことをよく覚えている。私はいつの間にか「楽しむ」ということを忘れ、「どの子も正しい指遣いができるように」「上手に演奏できるように」と、「学び」を強要していたのだ。これではもともと音楽を苦手と感じている子どもたちは、ますます音楽嫌いになってしまう。まさに「音が苦学習」である。上手にできるものが満足感を得られ、認められる、そんな授業が続いたら子どもも音楽に嫌気がさしてしまう。しかし、だからといって高学年になってから音楽を楽しむ要素全てを身に付けることは難しい。高学年の音楽を受け持つたびにそんなジレンマに陥ってきた。このような経験から音楽活動の基礎を培う低学年音楽の重要性に着目することにした。

小学校学習指導要領の音楽科の目標である「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てる」には、低学年における音楽経験が重要であると考え。小学校の音楽科は、単に音楽の基礎的な知識や技能を獲得することだけを目的としているわけではない。ベースになる基礎的な力を学びつつも、音楽を通して友達とよりよいかかわり合い、互いに高め合うことができる子どもを育てていくことが大切なのではないかと考える。小学校低学年は、初めて学習としての音楽を学ぶ時であり、義務教育9年間にわたる学習の土台を培う時期でもある。この時期に、音楽授業を通して友達と一緒に表現することの楽しさ、喜びを十分に味わわせ、いきいきと自己表現できるようにすることが大切である。

2 主題設定の理由

本実践研究の対象とした学級は1年生男子12名、女子15名、計27名の学級である。学年全体では5学級137人おり、当学級は聴覚障害児に合わせて比較的落ち着いたメンバー構成となっている。春日地域の大規模な幼稚園、保育園の出身者が半数いるが、全体では7つの幼稚園、保育園から集まってきている子どもたちである。入学当初は、多少の顔見知りの子どものみはいるようであるが、初対面の子どものみも多い。音楽の授業を進めていくうちに、入学して1カ月の時点で以下の実態が明らかとなった。

- 女子の多くは、知っている曲が流れると自然と元気に歌い出す。表情も明るい。
- 男子は歌ったり踊ったりすることに抵抗がある子どもが多く、知っている曲が流れても小声だったり身体表現を拒んだりすることがある。
- 女子の中に6～7人とても意欲的に歌ったり踊ったりする子がおり、その子どもたちがみんなのよい手本となって全体の音楽活動を活気づけている。
- 全員で歌ったり踊ったりする活動をしていると、必ず数人の男子が活動から離脱し、勝手遊びを始めてしまう傾向がある。

* 上越市立春日小学校

このような実態から、音楽活動によって友達づくりを促進し、「明るく元気な声で歌い、いきいきと音楽活動できる学級」「音楽が好き、と胸を張って答えられる子ども」の育成をめざした研究をしようと考えた。

H20年度に告示された新小学校学習指導要領では現行の理念を引き継ぎ、「音楽を愛好する心情」「音楽に対する感性」「音楽活動の基礎的な能力」という、心情、感性、能力の三つを目標とし、音楽教育の全ての過程において、常に児童の情意面と能力面とをかかわらせながら指導にあたる重要性を述べている。これは、子どもたちが小学校の段階で様々な音楽活動に主体的、創造的にかかわり、より楽しい音楽体験を積んでいくことが、今後子どもたちが生涯を通して音楽を愛好し、様々な音楽を通して明るく豊かな生活を送る原点になることを示している。授業レベルでは、授業を終えた子どもたち全員が「今日の音楽は楽しかった」と心から感じ、音楽活動をする喜びを得ることができれば、音楽科の目標を実現できたと言えるであろう。そこで、小学校低学年の音楽活動に着目し、友達と一緒に表現することの楽しさ、喜びを十分に味わわせ、いきいきと自己表現できるような活動や手立てを工夫する実践を考え、本研究主題を設定した。

3 研究の目的

本研究は、音楽科の理念を具現し、低学年児童が友達と一緒に、いきいきと音楽活動に取り組む授業や活動を実現することを目的とする。そのために、子どもの具体的な姿をもとに、指導の在り方、有効性を検討していく。

4 実践内容

(1) 日常生活に音楽活動を継続して取り入れた実践

① 「今月の歌」を活用した音楽活動の工夫

まず初めに取り組んだことは、「今月の歌」の活用である。

春日小学校では、4月から3月まで様々な場面で「今月の歌」を活用している。当学級では、音楽の授業のウォーミングアップの他に、朝の会に「今月の歌」の時間を位置付け、毎日朝から元気に声を出すことを1年間継続することにした。そうすることで音楽に親しむ時間をより多く生み出すことができ、みんなと心をつなげて歌ったり踊ったり、音楽をきっかけに友達とかかわり合いながら楽しい時間を共有したりすることができるよさがある。また、朝から声を出したり体を動かしたりすることで、一日の始まりを爽やかに元気にスタートすることができるのではないかと考えた。

1学期の初めは友達づくりを目的とし、歌とともにたくさんの友達と触れ合うことができる活動と考えた。『校歌』は、入学して初めて歌った曲である。まだ平仮名もよく読めない子どもたちであったが、1年生を迎える会でのお披露目を目標にし、繰り返し練習を行った。初めは歌詞の音読、次はゆっくりめにメロディーをつけて一番だけ、慣れてきたら拡大した歌詞カードを教師が指差して…というようにスモールステップを踏んで歌うようにしていったところ、1週間程度で歌詞を見ながら歌えるようになっていった。歌詞を覚えたところで、みんなで大きな輪になり、手をつなぎながら歌う活動を行った。そうすることで、拍に合わせて腕を振ることができるようになり、教師が真ん中で息継ぎの声掛けをすることで、息継ぎのタイミングも身に付けることができるようになった。また、学級活動で行ったボール送りゲームでも『校歌』を使い、拍に合わせてボールを送るゲームを楽しむことができた。入学当初から歌を拒否していたA児も、周りの友達の楽しそうな姿に「ほくも入る。」と言って参加できるようになっていった。

また、手遊びや身体表現などを子どもたちと相談しながら歌の中に取り入れていれることによって、さらに意欲化を図っていった。『アルプス一万尺』はリズムに合わせて2人組みでリズム打ちをする遊びが有名である。これは幼稚園で経験して得意という子もいれば、未経験の子もいたため「速め」と「ゆっくりめ」の2パターンを用意し、似たようなペースでできる子の中からペアを選んで遊べるようにした。そうすることで、苦手な子も自分のペースでゆっくりと遊べるようになり、歌に合わせて手遊びができるという成就感につながった。さらに、同じ相手ばかりでなく、いろいろな友達と触れ合うよう声掛けしていったところ、今まで親しくなかった友達と触れ合えるようになり、新しい友達のよさに気付くことができた。休み時間も様々な友達とペアになって嬉々として遊ぶ姿が見られ、友達関係の広がりを感じた。

1学期末、友達づくりが活発になり、友達と元気に遊べるようになってきた頃、ダンスにも親しむようにした。丁度折り良く、音楽委員会企画のダンスを音楽朝会で行う活動があったので、ダンス講習会の時に音楽委員会の子ども



たちの手本をビデオにとり、朝の会や帰りの会、音楽の時間などでビデオを見ながら練習するようにした。こうすることで、苦手な子どもたちも映像を見ながら少しずつ振り付けを覚えることができた。また、早くダンスを覚えた子は、苦手な友達に優しく教える姿が見られた。教師からだけでなく、子ども同士で教え合う場面を作ることにより、自尊感情の低下しがちな子どもたちも友達のアドバイスをすんなりと受け止め、元気に踊る姿が多く見られた。音楽朝会本番でも、とても意欲的にダンスに参加する子が多く、中には手本の委員会の子どもたちに迫る動きをする子どもも増えた。また期間中、教室内に歌詞を拡大し掲示しておくことで、自然と歌いながら踊る子が増え、歌いながら踊る楽しさを感じられるようになった。

この他に『スマイル アゲイン』や『世界が一つになるまで』などは手話を取り入れた活動を行った。当学級では聴覚障害児が在籍する。現在は補聴器を付けて過ごしているが、時折、補聴器の電池が急に切れたり、体調が悪化してしまったりすることで音が聞こえにくくなってしまうことがある。そこで、子どもたちに手話を歌と一緒に少しずつ覚えていこうと提案し、活動を行うことにした。子どもたちは手話を身体表現の一つとして喜んで覚え、歌と一緒に行えるようになっていった。「一緒に行こう」「手をつなごう」「笑って」「大丈夫」などは普段の生活によく使う言葉は、実際の場面においても使えるようになってきた。

このように、音楽の授業以外にも年間を通して様々なジャンルの音楽活動に親しむ時間を継続して保証することで、日常的に音楽に親しみ、友達と一緒に楽しく歌ったり踊ったりすることが好きになる子どもが明らかに増加した。学級みんなで歌うことや元気いっぱいに踊ることが楽しいという、音楽に対して肯定的な環境ができたことで、音楽の授業や朝の活動をとても心待ちにしている子が増えた。1年の終わりには「音楽が好き」と答える子が九割以上となり、日常的に音楽活動に取り組むよさを手ごたえとして感じる事ができた。

② 鍵盤ハーモニカ指導の工夫

小学校1年生では、鍵盤ハーモニカの導入が子どもたちにとって一つ大きなハードルとなる。過去に担任した1年生においても、「楽しんで演奏する」という領域に至った子どもは少ない。鍵盤の上達だけに意識がいくと、まさに「どの子も正しい指遣いができるように」「上手に演奏できるように」と、「学び」を強要する授業が増えていってしまう。そこで、鍵盤ハーモニカも日常的な活動を工夫していくことで、鍵盤ハーモニカに対する抵抗感を減らし、楽しく演奏できる子を増やしていきたいと考えた。

学年全体の実態として、2～3割の子どもたちが鍵盤ハーモニカを就学前に経験している。しかし指遣いは自由で、メロディーを演奏できる子は少ない。そこで、鍵盤ハーモニカを購入した時期に合わせて鍵盤講習会を開き、専門家から演奏前後の決まりや演奏の基礎的な事柄を学ぶようにした。共通の決まりがないと、学級毎にバラバラな指導になり、学年全体での指導場面で子どもたちが混乱することが予想されるからである。演奏前の歌口の位置、「用意」の掛け声で歌口をくわえるなど、演奏前後の決まりをしっかりと学ぶことで、授業においても指示を聞いてから音を出すということが身に付き、勝手な演奏をする子どもが少なくなった。また、一音一音息を吸って演奏する子が減った。

1学期の音楽の授業では、鍵盤を扱う楽曲が教科書にほとんどないことから、簡単な練習曲を作り、鍵盤ハーモニカにより親しんでいけるように工夫した。初めはドとソだけで構成されている簡単な練習曲から始めた。ドとソの位置を覚えたら、子どもたち誰もが知っている『ちゅうりっぷ』『メリーさんの羊』『スイカの名産地』などの童謡の一部、『チャルメラ』『小池さんのポテトチップス』などのCMの曲等をアレンジしたものを用意して練習を行った。また、黒板に掲示したりファイルに綴ったりすることで、いつでも練習できるようにした。基本的には音楽の授業で鍵盤ハーモニカを吹く前の「指の体操の時間」として扱った。黒板に新しい曲が掲示されると、進んで友達を誘い合い、休み時間にも友達と仲良く演奏を合わせて楽しむ姿が見られるようになっていった。また、シートに指遣いも合わせて書いておくことで、自然と無理なく指遣いが身に付いていった。月の終わりには2人組み程度で友達の前で発表したり、教師が評価をしたりしていくようにした。これを繰り返していくうちに、学級みんなの前で発表する緊張感に慣れ、うまく演奏できたことで自尊感情の高まりも見られた。うまくいかなかった子に対しては、できるようになるまで教師が個別指導を行ったり、得意な子がミニ先生になって教えたりすることで演奏技能が身に付き、自信をつけるようになっていった。

このように1年間継続して「指の体操の時間」を行うことで、様々な曲を覚え、5本の指を使って演奏することに

ちゅうりっぷ①									
★のところが ふきます。 ☆は ちゃれんじしたいひと									
★	ど	れ	み	うん	ど	れ	み	うん	
	1	2	3		1	2	3		
☆	そ	み	れ	ど	れ	み	れ	うん	
	5	3	2	1	2	3	2		

慣れることができた。また、教科書にある「きらきら星」や「小犬のマーチ」にも難なく取り組む子が増えた。音楽フェスティバルに向けた活動では「森のくまサンバ」の難しいパートにも進んで挑戦しようとする子が多く、本番の発表ではリズムに合わせて腰を振ったり、ひざでリズムを刻んだりしながら演奏を楽しむ姿がたくさん見られた。

(2) 音楽フェスティバルを中核とした授業実践

① めあてカードの工夫と振り返りの重視

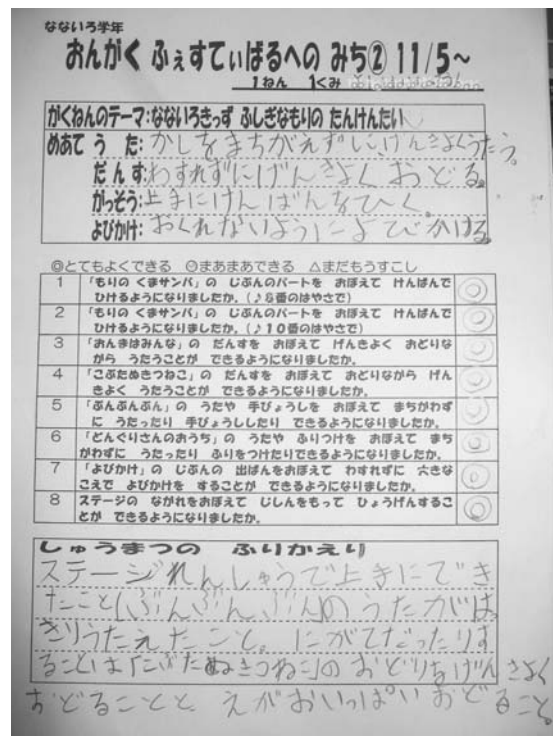
今まで学習してきたことが、次の活動を意欲をもって進めていくためのヒントになることがある。そこで、子どもたち一人一人が学習活動を通して感じたこと、考えたこと、これから挑戦してみたいことなどを書き残していくことで、自分の活動の降り返りができるようにしたいと考えた。しかしながら、1年生の子どもたちが9月半ばから11月半ばまでの長いスパンの中で自分の成長を実感するためには、一人一人に具体的なめあてをもたせ、ある一定期間の中で継続して振り返る活動を行っていく必要がある。そこで、1週間を1単位とし、週末の音楽の時間にカードを用いて振り返りを行ったり、新たなめあてを立てたりする活動を継続していくことにした。チェック項目は予め教師の方で提示し、その項目と自己評価をヒントに、次週のめあてが立てられるようにした。週末の振り返りでは、個々の進歩、学級全体の進歩を互いに認め合うことができるよう、発表し合ったり、教師からコメントを入れたりするようにしてきた。お互いのがんばりを認め合うことで、お互いの思いに共感したり励ましあったりする姿が回数を重ねるごとに多く見られるようになっていった。また、教師や友達から褒められることで「できた」という実感がもてるようになり、自信をもって表情豊かに演奏・演技を行うことができるようになっていった。

めあてカードの他に、情報機器を効果的に用いた振り返りも行うことにした。自分や学級全体、学年全体を客観的に見るということは、1年生の子どもたちにはとても難しいことである。しかし、練習の様子をビデオで撮りためていき、プロジェクターに写した映像をもとに振り返りを行うことは、1年生の子どもたちにもできるのではないかと考えた。実際に友達の口の開け方、姿勢、身体表現などの様子を、視覚・聴覚情報を通して捉えることで、自分や友達の表現のよさや課題に気付く子どもが多かった。この映像を使った振り返りは、次時のめあてを立てる際、具体的なイメージをもってめあてを立てることに効果が現れた。また、自分が映像に写されるということで、実際に観客から見られるという意識が高まり、よりよい表現をめざしたいという意欲にもつながった。

② 互いのアイデアを出し合い、身体表現に磨きをかける工夫

低学年の特性を生かして、歌唱や合奏だけでなく身体表現にも力を入れていくことにした。音楽フェスティバルは全部で6曲演奏した。そのうち『こぶたぬきつねこ』と『おんまはみんな』の2曲は主に身体表現を楽しむために選択した曲である。学年全体での発表であるが9月の段階では、まず学級ごとに子どもたちとどんなイメージの曲であるか、どんな動きがびったりかなど実際に踊ってみながら話し合い、表現を決めていくようにした。各学級のアイデアが固まってきたタイミングで、5人の担任が子どもたちから出たアイデアの共通部分と相違部分を確認、全体で話し合わせたい部分を考え決定し、学年全体での話し合いへと繋げていくようにした。各学級の代表者が学年みんなの前で表現した後に、学年全体で話し合いを行った。「狐と猫の動きがほとんど一緒になっちゃうから手だけでなく足も上げようよ。」「くぱぱか走る」のところはその場駆け足よりも、その場で3回ジャンプするとリズムに合うよ。」「誰も知らない」の部分は、○組のアイデアがおもしろい。見ていてわかりやすいです。」140名弱が集まっての話し合いはなかなか大変であった。似たような部分でも、お互いに考えたアイデアを譲れる部分と譲れないこだわりの部分があるため、最終的にはいくつかのアイデアから多数決で決めていくようにした。こうして子どもたちと教師の総意でステージを創り上げていった。

実際の練習場面では、①で記述したビデオを見ながら話し合っていく他、学級単位や列毎などのグループで互いに



成果を発表し合いながら、お互いのよさやがんばりを認め合ったり、表現向上のためにアドバイスを出し合ったりしていった。苦手な部分やよく分からない部分がある子どもたちには、得意な子どもたちがミニ先生となり、子ども同士で教え合う場も設けた。また、身体表現が得意な子どもたちの踊りを見ることで、大きな動き、素早い動き、笑顔で踊るよさ等みんなで心掛けていきたいことを話し合い、お互いの表現に磨きをかけていくようにした。

このように、音楽フェスティバルという行事を通して、大勢の友達と音楽を創り上げていく喜びや、大きなステージに立って演奏する喜び、たくさんの拍手をもらう嬉しさを感じることができた。また、様々な学年の発表を鑑賞することで、今まで近くで見たことがなかったリコーダー奏や金管演奏を身近に見ることができ、「私も6年生になったらトランペットをやってみたい。」という上級生への憧れや進級後の意欲につながった。そして、次の学年での音楽活動に意欲が引き継がれていくことを確信した。

(3) 楽しみながら表現技能を高めていく授業実践

(1)(2)で述べた子どもたちを引き続き担任することができた。2年生男子10名、女子15名、計25名の学級である。男子2名が特別支援学級に入級し、交流学級として介助の先生とともに音楽に参加をしている。1年間様々な音楽活動を積むことで、全体的に友達と歌ったり踊ったり、みんなの前で発表したりすることが好きになった子どもたちが増えたと感じる。個人差は大きいものの、活動に全く参加できない子どもは減少した。そこで2年次においても1年次の実践を継続し、発展していくこととした。

① 「ドレミ体操」から楽しく音の高さを感じ取る工夫

2年次では1年次に意識して取り扱わなかった「音の高さを感じとる力」を伸ばす活動に着目して取り組んだ。6月の「ドレミで遊ぼう」の活動では、鑑賞教材である『ドレミの歌』に合わせてドレミ体操を行った。ドレミ体操は音階を理解するための身体表現として学習活動の一つに設定されている。簡単に言うと、ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階に合わせ、音の高さによって手を上げたり下げたりする体操である。初めは音楽に合わせて教師の動きを見よう見まねで表現するようにした。音楽のテンポが速いのと、次々にポーズが変わることが子どもたちにとって難しいと感じる要素となった。そのため、初めはドからミ、覚えたらドからソ、というように、スモールステップを踏んで学習を進めていった。また、「ドはドラえもんのだからドラえもんのポーズだ。」「ファはファイトのファだから、胸の前でハートを作るといいよ。」といった子どもたちのアイデアを生かし、少しずつ動きを変えて覚えていくようにした。教科書に提示されている腕の高さは変えずに、手や指の動きだけを改良していくことで、多くの子どもたちが身体表現を楽しみながら音の高さを感じ取ることができた。さらに、音楽作成ソフトを使って、『ドレミの歌』をゆっくりめのものから範唱CDと同じ速さのものまで5種類のテンポのものを作成し、練習の際に活用した。そうすることで、苦手な子どももゆっくりしたテンポに合わせて安心して練習を行い、友達と一緒に表現する楽しさを味わうことができた。

せっかく「ドレミ体操」を覚えたので、『ドレミの歌』以外にも『かっこう』や『かえるのがっしょう』などで、「ドレミ体操」を活用することにした。2曲とも「ドレミ体操」で音の高さを理解することで、鍵盤のどの位置で演奏するのか予測が立つようになり、「ドレミ体操」が鍵盤演奏にも役立った。

② 身体表現を創り上げる活動の工夫

1年次には、みんなで同じ身体表現ができることを目的とした活動が多かった。そこで2年次では、4～5人のグループ単位で互いにアイデアを出し合い、楽曲に合った表現を創り上げていく活動を行うことにした。扱った楽曲は『かえるのがっしょう』である。まずは個々に歌詞や曲のリズムに合わせて即興表現を行った。次にグループ全体で「必ず交互に動く部分を作ること」を新たな課題として提示し、話し合いを行うようにした。グループのリーダーを中心に話し合いを進めていき、ワンフレーズ毎の動き練り合い、工夫していった。そして決定した動きを右図のようなシートに絵と文で書き込んでいくようにした。1番単調な「ク



ワックワック…」の部分に友達と交互に動く部分を取り入れていたグループが多く、発表の見所の一つとなった。グループ毎の発表会では各班のシートを拡大し、グループの表現の工夫点や見所を互いに伝え合う活動も行った。伝え合うことでどうしてその動きを取り入れたのか理由が明らかになり、鑑賞する側の子どもたちもより一層興味をもって発表を鑑賞することができた。友達と身体表現を工夫していくことで、グループみんなで力を合わせて表現を創り上げていく楽しさや喜びを感じる事ができた。また、友達と協力し合うことの大切さを体験から学ぶことができた。

5 考察

(1) 実践の成果

日常活動である「今月の歌」の活用については現在も継続しており、子どもたちは「朝歌タイム」をととても楽しみにしている。また、音楽係がアイデアを出したり友達からアイデアを募集したりして、さらに身体表現に改良を加えて楽しむ姿が見られる。また、拡大した歌詞カードに息継ぎのマークを入れて息継ぎを事前に声掛けすることにより、『千の風になって』のようなゆったりとした曲でも、しっかりと息継ぎを意識して歌えるようになってきた。

鍵盤ハーモニカについても指遣いを意識した演奏を心掛ける子が増えた。また、階名視唱の他に指番号視唱もできるようになり、具体的な指運びをイメージしながら演奏できる子が多くなったと感じる。「指の体操」では、子どもたちがよく知っているCMや歌謡曲の一部を練習曲として与えたところ、苦手な子どもでも喜んで練習するようになり、できたときは得意満面で「聞いて、聞いて」と披露するようになった。

めあてをもって活動に取り組み、振り返りの場を大切にしている活動については、長期に渡るめあてカードや活用により、個々の進歩の様子や成果が各自でつかめるようになり、自己評価する力も伸ばすことができた。また、活動後に互いの表現について振り返りを継続したところ、自分の表現や友達の表現について積極的に話そうとする子どもが増えてきた。特に友達に肯定的なメッセージを伝える力が伸びたと感じる。

身体表現を行うことでは、教師からの提示はもちろん、友達と考えた表現についても喜んで取り組む子どもが増えた。また、グループでの発表などを繰り返し行うことで、人前で表現することを苦手としていた子どもも意欲的に活動に取り組むようになってきた。友達から褒められることでさらに自信がつき、自己肯定感を高めるという点で考えても有効な活動であったと考える。

様々な活動を通して、友達と一緒に喜んでいきいきと音楽活動に参加する姿が多く見られるようになったと同時に、子どもたちの具体的な姿から音楽の基礎的な力がしっかりと身に付いてきたと感じる。授業後、3階の音楽室から1階の教室へ帰る時に、本時で学習した曲をにこにこ楽しそうに歌いながら歩く姿は、本時の学習がうまくいったかどうか、楽しかったかどうかの指標となる。今後もこのような姿が多く見られるように活動を工夫していきたいと思う。

(2) 課題

実践の課題としては、音楽の指導計画の重要性が挙げられる。年間の見通しをもって、どの部分でどのような力を見につけていくか、長期的展望のもとに計画を立てていく必要がある。本実践では日常活動の「今月の歌」と音楽授業との関連が薄くなってしまいう活動や身体表現に偏った活動も見られた。また同時に、一時間一時間の授業の組み立てをしっかりと行うことも大切であると感じた。単元の中で歌唱、身体表現、鍵盤演奏等のバランスを考えて授業を組み立てていくために、教師がしっかりと教材観をもって指導計画を立て、一時間一時間の活動を工夫していく必要がある。

参考文献

- ・文部科学省 小学校学習指導要領解説 音楽編 2008
- ・小学校学習指導要領 新旧比較対照表 日本教材システム株式会社 2008